

2021年12月26日 礼拝説教要旨

詩編講解説教90「至福の人生へ」

詩編90：1～12、Ⅱコリント5：1～5

詩編第90編は「嘆きの詩編」に分類されます。全体的に人間の本質的な問題としての罪、死の問題、それゆえに儂い存在になってしまったことを嘆くという内容になっています。それゆえ、この詩編はキリスト教の葬儀でよく読まれます。「あなたは人を塵に返し、『人の子よ、帰れ』と仰せになります。千年といえども御目には、昨日が今日へと移る夜の一時にすぎません。あなたは眠りの中に人を漂わせ、朝が来れば、人は草のように移ろいます。朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい、夕べにはしおれ、枯れて行きます」(3～6節) ここには死にゆく人間の儂さが謳われています。

しかしそういう人生観は、別に聖書ではなくても、一般的によく見られるものではないでしょうか。例えば、仏教の浄土真宗の葬儀でよく聞かれる「白骨の章」というのがあります。「されば、朝(あした)には紅顔(こうがん)ありて、ゆうべには白骨となれる身なり」という行があります。朝には元気でいても夜にはどうなるか分からない。それはこの詩編で言えば「朝が来れば花を咲かせ、やがて移ろい、夕べにはしおれ、枯れて行きます」(6節)に通じていると考えられます。そういう無常観のようなものを聖書も伝えようとしているのでしょうか。

もちろん死に至る人間の儂さ、有限性というものを聖書もまた語っていると一方で言えるでしょう。けれどもそれだけではありません。その儂い人間と常に対峙しているお方がおられる。それは永遠なるお方、神さまであります。その神さまとの関係の中に、わたしたちの生も死もあるのです。そのような信仰は一般的に言われるような、人生は短いとか、無常であるとか、もののあわれとか、そういうものとは根本的に違うと言わなければなりません。人間を「考える葦」と言ったパスカルはその著書『パンセ』の中で「神なき人間の惨めさ」を説いています。もしわたしたちが神さまなしに生や死を論じるならば、それは結局その儂さを嘆いて終わりでしょう。いくら哲学的に人生を説いても、そこには最後虚しさだけが残るのです。それは気持ちを紛らわす言葉遊びでしかありません。

主イエスは福音書で言われます。「二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることははない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている」(マタイ10：29～31) 人間は自然に発生したり消滅したりするものではありません。それなら人生は虚しいとしか言いようがありません。しかし、信仰によれば、人間は神さまによって創造されました。わたしたちの生も死も神さまのものであり、神さまがご支配なさるのです。

確かに人間は移ろいゆく、儂い存在です。また「人生の年月は七十年程のもので。健やかな人が八十年を数えても得るところは労苦と災いにすぎません」(10節)とあるように、わたしたちの人生は労苦と災いの連続であるということも事実です。それはどうしてでしょう。「あなたはわたしたちの罪を御前に、隠れた罪を御顔の光の中に置かれます」(8節) その原因は罪であると聖書は教えます。それゆえ罪を犯したアダムに神さまは言われました。「塵にすぎないお前は塵に返る」(創世記3：19)と。それが「人の子よ、帰れ」(90：3)ということなのです。

けれども忘れてはならないことは、その一連のことは、神さまとわたしの関係の中で起こっていることなのです。人間は神さまに背き、罪を犯した。それゆえ塵にすぎないわたしは塵に返らなくてはならない。でもその儂いわたしという存在にすでに神さまが関わっておられる。永遠なる神さまが、このような儂い、労苦と災いの連続のわたしに関わってくださり、そこからわたしたちを救いの中に招いてくださる。その信仰が人生の捉え方を大きく変えるのです。

先週、わたしたちはクリスマスを祝いました。イエス・キリストの誕生は、永遠なる神さまが、この儂いわたしたちのところに、この有限の世界に入ってこられたということです。ただ入ってこられただけではない。ご自身が永遠であることを捨てるようにして、わたしたちの儂い存在をその身に担われた。罪ゆえに塵に戻るわたしの体をご自身のものとされたのです。それがまことの人となられたイエス・キリストです。そしてイエス・キリストは十字架でわたしたちの罪を贖い、三日目によみがえられて永遠の命を与えてくださいました。洗礼を受けてキリストに結ばれることにより、わたしたちはこの永遠の命をいただくのです。その神さまの永遠の中にわたしたちの人生は迎えられています。

パスカルは「神なき人間の惨めさ」に対比させて、信仰ある人間を「神とともにある人間の至福」と言います。信仰を持って見るときに、それは神さまが関わってくださる人生なのですから、どんなに儂く思えるような人生でもまた至福の人生と言えるのです。そしてそのように自分自身の人生を神さまのものと捉えること、それが「生涯の日を正しく数えるように教えてください」（12節）ということです。この年の終わりに詩編90編を読むことは意味深いと思います。新しい年はどういう年になるのか誰もわかりません。でも信仰によって、その年もまた至福の年となるでしょう。そのように恵みを数えながら新しい年も歩みましょう。